

令和4年度外部評価委員会議事録

徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター

1. 日時

令和5年3月24日（金）14:00～16:00

2. 場所

第3教室（自治研修センター内）

3. 出席者

外部評価委員会委員

喜多條委員長、友滝副委員長、郡委員、里委員、根木屋委員

オブザーバー

徳永政策企画専門職（消費者庁新未来創造戦略本部）

政策研究センター職員

林所長、板東副所長、伊月研究員

関係部署職員

細木講師（徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野）

坂本教授（鳴門教育大学大学院学校教育研究科）

加渡教授（四国大学短期大学部ビジネス・コミュニケーション科）

多田准教授（阿南工業高等専門学校創造技術工学科建設コース）

長谷川教授（阿南工業高等専門学校創造技術工学科電気コース）

大柳戸課長補佐、福永主任（南部総合県民局地域創生防災部）

藤原主任、山内主事（西部総合県民局農林水産部）

4. 委員会実施概要

開会挨拶 林所長

評価基準、評価結果の取扱いについて

令和4年度調査研究報告及び質疑応答

令和5年度調査研究テーマについての助言・提言

5. 議事概要

議事1「評価基準、評価結果の取扱いについて」

(1) 達成度、(2) 先駆性、(3) 適正性、(4) 実用性、(5) 発展性の5つの視点ごとに各委員が、「5非常に優れている、4優れている、3普通、2あまり評価できない、1評価できない」の5段階評価で採点を行い、委員全員の採点結果の小計と全評価項目の合計、併せて委員からの所見の代表的なものを公表することについて、各委員から了解を得た。

また、評価表の記入方法について改めて確認を行った。

議事2「令和4年度調査研究報告及び質疑応答」

(1) 装飾品に対する品質表示の提言をめざす 一般企業等に対する金属アレルギーの実態調査に関する質疑応答

- A 委員：研究の内容はおもしろい内容でよくわかったが、政策提言をいただくところに関し、一般の人や各自治体の人に見ていただく内容のため、政策提言として明確な表し方をしてほしい。
- F 研究員：政策提言については、本結果をもって、消費生活アドバイザーコンサルタント協会の方、消費者庁の方に再度お願いするのが一つ。それと、学会で厚生労働省の協議会の委員の方に働きかけたことから、そちらの方のアンケート等で金属アレルギーを取り上げてもらえるようになった。さらに情報発信に努めていきたい。
- B 委員：アンケートの最初でアレルギー全般について質問しているが、金属アレルギーから始めても良かったのでは。
- F 研究員：アレルギー全般の中で、金属アレルギーが増えているかどうか、アレルギー全体が増えているかどうか。その比較をしないと、ピアスが増えているから金属アレルギーは増えているんですということが言えないため、アレルギー全般も質問している。
- B 委員：アンケートの対象として、他の企業にも打診するなどして、複数の企業の中からこの2社の社員が選ばれたのか。
- F 研究員：オーラルケア関係の企業はお願いしやすかったため。貴金属関係の企業は、報告書の表紙写真にもなっている化粧品開発で当方のブースに来てくれた繋がりをお願いした。他にもブースを訪ねてくれた企業が何社かあったため、今後はそちらにもお願いしていきたい。
- B 委員：貴金属アレルギーに直接関わっているところからあと2・3社選び、そこに聞く方がより完璧だったかなというのが感想。
- F 研究員：業種ごとに分けているため、今後分析したい。
- C 委員：昨年度は学生対象のアンケートだったところ、一般の人を対象としたということで、少しずつレベルが上がってきているなという感覚を持った。私たちがいつも口にする食品や衣服に関しては表記がきちんとあるのに、貴金属に関しては何も書いていないことをこの研究で知った。アレルギー全般についても周知されているが、貴金属のアレルギーに関しては、やはり深く突き詰めていくことによって得られる知識。そうしたアレルギー症状に苦しむ減るのはすごく良いことだと思うので、今後も続けて研究し、成果を上手に発表してほしい。

(2) 消費生活のデジタル化に対応する若者向けガイドブックの開発に関する質疑応答

- D 委員：ガイドブックができたのは、すごく成果だなと思う。手に取りやすいし、わかりやすい。この調査におけるアンケートについて、パーセンテージが出ているが、分母は何人ぐらいなのか。

- G 研究員：報告書5ページに記載のとおり、アンケートは、当方の授業を受けてる学生と、他の県内2大学の授業を受けている学生に依頼。おそらく500人ぐらいの中で、答えてくれたのは350人ぐらい、最後まで答えてくれたのは192人。
- D 委員：高3で18歳になる子がこれから増えていくわけで、こうしたガイドブックを活用しながら、少しでも消費者の若者たちの被害がないようにするのは良いことだと思う。
- A 委員：Wi-Fi回線という名称について、アンケートには定義などはあったのか。私が持っているイメージだと、インターネット回線というものがまずあって、インターネット回線の中でWi-Fiを使う場合、というイメージだが、Wi-Fi回線というのがもうすでに独立したカテゴリーとして認識されているものだろうかと思った。
- G 研究員：正確な名称ではなく教科書には載っていないが、学生と一緒に調査票を作る上で、何が一番ピンとくるかなということで、学生に流行している用語として使った。
- A 委員：学生に通じるということであれば、それはそれで有効だと思う。
- B 委員：たしかに、若者の消費生活の中で、ガイドブックを作るということは非常に有意義なことだと感じている。若者よりは高齢者の方が被害があるのではないかという感想。それはそれとして、これから社会に出ていく中で、大人よりは被害認識が少ないところでこういう調査をしようというのわかるが、もう少し、なぜ若者のデジタル被害が重要なのかという一つの項目を作っていただいて、若者だったらこういう落とし穴があるんですよという一つの項目として作っていただけたら、もう少しわかりやすかったかなと思う。
- G 研究員：消費者庁で取った別のデータを分析したところ、20・30代の男性が非常にデジタルで被害にあっているということがわかった。デジタル強者と言われている人たちが、むしろ被害にあっている。高校生もクラスで2人ずつお金をだまし取られているという件がわかったりしている。高校生には伝える場があるが、高齢者となると伝える場を考えるのが少し難しい。これから考えていこうと思う。

(3)「住」生活における消費者志向経営の推進～住まいづくりのエシカル化が消費者志向経営推進に及ぼす影響～に関する質疑応答

- B 委員：昨年度の研究だったか、こちらのカードゲームはなかなか面白いなと思っていた。それを活用して今回発展させていく。それについては評価する。四国の中で面白いなと思ったのが、愛媛の、エシカル消費をおもいやり消費と言い換えている点。これは非常にやわらか。こういうところもいいのかなと思うし、消費者行政の消費者庁の誘致を進めている本県としては、これを入れるのかなと思った。これも感想だが、四国に絞らず、関西広域連合だとか、都会の人は

どういう意識なのかなというのが知りたかったなというのが一点と、この調査方法の中で、徳島県は500人だが、あとの3県は200人。分母をそろえたほうが良かったのではないかなという意識を持ったが。

- H 研究員：予算の関係。500人とする予算がなかったため、どこかを厚くするか、均等にするか。均等にするよりは、これからのデータの活用を考えて、徳島のデータ数をたくさん取っておこうということで500とした。また、関西広域連合でも調査をというご意見については、次の発展として、四国ではこうだった、徳島ではこうだったが、関西広域を構成する府県はどうかという形で調査したいと考える。
- C 委員：SDGsについて、いろんな話をしながら実際にカードゲームなどをして事業者の人たちの意識を高めたとのことだが、その業者さんに行ったときに、こういう形でエシカルについてやっているんですけど、一緒にやりませんかという受けてくれるものなのか。
- H 研究員：今回一事業者だったが、そもそもこの事業者は、非常に意識が高い。いろいろ話すと、建築関係というのは建築に関するSDGsやエシカルに直結する認証制度が非常に複雑で、事業者でも全部が全部把握できないくらい複雑だったとのこと。その中で受けていただけるイコールもともと意識が高い。逆に言えばそうではない事業者にどんどん使っていただくことが今後の課題と考えている。
- C 委員：インタビューの中で、トレードオフからトレードオンへという言葉も出ていて、非常に意識が高い人もいるんだなということがわかったが、まさにそれが理想であって、もっと業者に働きかけて、わかりやすいところから認識を高めてもらいたい。
- E 委員：私は業務で関わりがあるが、空き家や放棄地が累積していく。住む人がいなくなる。今回エシカル消費という消費として扱っているが、今後工事していく、昔の家を代々伝えていくのもSDGs。継続的、持続的な社会作りや地域作りになっていくと思うが、今後エシカルな良い家を建てたとしても、その後、どう保持していくかという未来に向けて、今の時代の世代の生活のことだけを考えて建てているところはあると思うので、今後の質問事項に、未来に向けてどう保持していくかという認識なども少し加えていただけたらありがたいと思う。とても良い取り組みだと思う。

(4) 地域循環型プロダクトを生み出すプラスチック・リサイクル・マイクロプラントの開発によるマテリアル・リサイクルの普及促進に関する実証的研究に関する質疑応答

- A 委員：押出成形機でできあがるのはどんなものなのか。
- I 研究員：押出成形機でできあがったものは無い。押出成形機は現在完成はしている

が、まだ実際にプラスチックを入れるところまでできていない。その手前まで。

- A 委員：この仕様だと、どんなものができてくるのか。
- I 研究員：今回 PLA を使っている。PLA というのは、3D プリンタを作るフィラメントという細長いプラスチックがあり、それを作る機械となっているが、細長く出しているところを巻き取る形になっている。ほぼ全ての試作を 3D プリンタで作っている。今まで実は失敗したものは捨てていた。再利用できなかったが、それを再利用するものを今回作った。今の時点で言うと、破碎の方はプラスチックを集めてくるとできて、作る方は PLA でしかまだできない。今後 PE の方が作りやすいと思うので、PE の方ができれば報告書 2 ページにあるようなプラスチックが作れるようになる。
- A 委員：3D プリンタのランナー部分もこれでクルクル回せるということか。
- I 研究員：そう。今までも再生 PLA というのは実際フィラメントとして販売もされているので、その部分というのは最終的な製品が非常に作りやすかったというのはある。PLA は混ざっているものが何かがわかっているが、例えば海洋プラスチックなど、外国の製品のプラスチックの PE は、その中に本当は何が混ざっているのかは企業秘密なので、わからない場合が多い。本当はプラスチックだけではない場合が多数ある。たとえば鉛が入っているだとか、様々なパターンがあり、小学生にこれをお皿に取りまじょうとやると、実際には危ない場合があるので、実用可能な PLA を先に作り、できれば来年度、普通のペットボトルをやりながら、特にふさわしい製品の中で、どこか企業で情報を公開してくれるところがあれば。そのプラスチックの中に、本当は何が入っているのかというのがわからない。まずはどこか情報を公開してくれる企業を探して、安全性を確認した上で作らないと、とんでもない大失敗につながると思う。
- B 委員：押出成形機についてはどうなるかというのはまだという話だが、破碎機についてはどうか。
- I 研究員：破碎機は、報告書 5 ページにミル、次のページに完成品の写真がある。今は物は完成していて、破碎はまだしていない。
- B 委員：この破碎機については、廃プラスチック、たとえばペットボトルなどいろいろあると思うが。
- I 研究員：13 種類どの種類のものでも、全部粉碎することができ、子供の手でも粉碎できるようになっている。
- B 委員：非常に興味深かったのが、この 3D プリンターは急速に発展しているが、それがこのようになるということが勉強になった。今後の大きな課題かなと思うので、今後完成させて、実際にやってみて、これがこういう風になりますよというのが見られたらと思う。
- C 委員：この破碎機というのは、今後きちんとしたものができたときに、どういったところで活用されるのか。
- I 研究員：とりあえずは来年度については、小学校向けにイベントをしてみようかなと。それに、賛同してもらえるような方がれば一緒に作り、プレシャスプラスティ

ックというのが日本には4カ所あるが、世界だと50何カ所か拠点がある。その徳島みたいなのに手をあげてくれる人がいれば、そうした活動をしていければ。プラスチックペットボトルが一番わかりやすい。それが燃やされているという真実を知った後に、次どうするのかということをお子たちに教える活動にしていきたいと思う。

(5) 協働ロボット普及を目指したロボットに関するニーズ及び実態調査に関する質疑応答

- B 委員：私も協働ロボットがどれだけ進んでいるか知らなかったが、たとえば全国平均の中では徳島はどれくらい進んでいないということなのか。
- J 研究員：都市部、大企業があるような都市部では進んでいて、中小企業が多い地方都市では、進んでいないということになる。県内であれば調査ができると思ったが、全国的に調査するのが少し難しそうで。県内の状況であれば、各社に聞かなくても、代理店に聞けば正確な数字が得られると判断して、代理店に聞いた。
- A 委員：民間で実習し、2日間で修了したということだが、2日間のコースで、大体どれぐらいのレベルに達するのか。ヒアリングでは気づきが得られたレベルということだが、実際に使いこなすというレベルにいかうとすると、どれぐらいのコースを設定するのか。
- J 研究員：基本的な動作ができれば、あとは時間をかけて会社の中でやりたい動作をロボットに教え込んでいく。試行錯誤をしながら。今回は一番よく使う、電動グリッパーだけやっている。オプションをもう少し増やして、そこをやれば、もう1日するだけで十分な内容になるのではないかと思う。
- A 委員：実際に動かしながら、人間がガイドしている感じか。
- J 研究員：移動するところまでクリックし続けるか、ロボット自体を手を持ってここに動かせと教え込ませる。両方できるようになっている。これは手で押し込んで教え込んでいるということ。
- A 委員：短期間で習熟させていくことが有効という感じか。
- J 研究員：産業ロボットは使いやすいものなので、短時間で基本的な内容は理解できるかと。あとは時間をかけてやっていけば。

(6) 公園等の刈草を原料にした資源循環型堆肥の有効利用調査研究事業に関する質疑応答

- A 委員：この取り組みで、もったいない2号を作るのに高校生やシルバーさんも雇ってというお話を聞いたことがあるが、製造運搬コストともったいない2号から処分するというコストとの比較というところはどうか。
- K 研究員：大体、焼却処分するのに、運搬費用を除いて1トン当たり1万円くらいなので年間500万円くらいが焼くだけにかかっており、当然、運搬費用は別にかかっている状況。それが別の場所で堆肥ができるようになったら、当然運搬費用

はかかってくるが、焼いて環境を悪くするためにお金を払っている状況とコストが大して変わらないのであれば、堆肥ができたほうが良いお金のかけかたになるよねというところがあって、今回農家さんからいただいた提案としては、フォークリフトなどの免許を持っている方に作業していただいたら、その人の人件費さえ出してくれたら、あとは自分のところで使いますよという形で、今と比べて半分くらいの金額でできるかなというようなご提案をいただいている。

- B 委員：刈草の470トン内、堆肥化12トンということだが、他の地域や他県などの状況はどうか。
- K 研究員：全国的な状況までは把握ができてないが、緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクトの主になっている方にお話を伺ったら、全国的にもこういう取り組みはほとんどないと。調べたら、埼玉県の方とかで、大きなプラントを作って、ゴミ処理場の中に、切った木の枝などを含めて、堆肥化するプラントというものはあるが、ただの屋根のある倉庫だけのところで堆肥化するという取り組みはあまりないということを知っている。
- B 委員：栽培試験のところにもあるが、販路拡大の可能性を探るということと、コンポストの事業化の可能性を探る。このあたりは、今後の基本的な取り組みでないかと思うので、是非やっていただきたいと思う。
- C 委員：視点はすごくいいなと思って見させていただいた。商業施設で販売してアンケートのハガキをつけてと。何か具体的にアンケートのハガキに対する回答があったのか。
- K 研究員：それは今、高校生たちがまとめているところではあるが、概ね家庭でこういうことができるのかと興味を持ってくださっている方が多かったということは聞いている。
- C 委員：シャカシャカのおいしさはどうか。
- K 研究員：今回、ハウスの中でやっていただいて、私も何度か見学に行ったが、全くおいがなくて。当然野菜が育ってくると、野菜に来る虫などはつくが、分解される段階で腐っているようなおいがするとか、そういうことは全くなかった。
- C 委員：家庭を考えると、おいがするものは置けないというイメージがあったので、また私も試してみようと思う。
- K 研究員：先生の方からも、魚などを入れるとどうなるかわからないが、ちゃんと分解されていけば問題ない、他の菌は無いので、ということは何っている。
- B 委員：意見の中で、たとえば、『環境に良い』だけでは消費者へのアピールとして弱い。『おいしい』から『環境に良い』につなげるなどの工夫が必要」だとか、一番最後の、「万博の会場整備では、徳島に一番近いところ、空飛ぶタクシーの発着場の周辺で『もったいない2号』を使ってもらおう予定」など。こういうのはできればやっていただきたいなど。障がいのある方の作業への参加、こういう取り組みは良いと思う。

(7) にし阿波高校生「聞き書き」プロジェクト

- C 委員：食と農の名人という人が何人かいて、インタビューを受けているが、この人たちを選任する意味は何かあるのか。あまり人数がいらっしやらない地域だと思うので名人を探すのも大変だし、この人にインタビューするからこういうことを受けてくださいねということも良いことだと思うが、名人もだんだんと年を取ってくる。そうすると逆に名人を育てていかないといけない。そのために関わった高校生たちが、その地域に根付いてやっていこうかなと、そこまで見越さないと、今の方がいなくなったときに、傾斜地の農業というのは途絶えてしまうんじゃないかなという危惧を感じる。こういう過疎地においてこれを守るためには、名人を作っていく努力は必要だなと思う。生徒たちが経験したことは人生において貴重な経験だと思うが、あわせて守り育てていくことは大切だと思う。
- L 研究員：食と農の名人について、毎年何人かづつは新しい人を採用するというようにして、今度も3人、まだ30代という若い人も認定する予定になっている。
- C 委員：認定の基準はあるのか。名人になるための基準とか。
- K 研究員：傾斜地の伝統料理について自分で活動していることに加えて、さらに情報発信を積極的に行っているような方を審査して認定している。
- C 委員：学生さんたちの意見の中に、他の国の言葉を話せなくてもコミュニケーション云々がというのがあったと思うのですが、外国の方たちが世界農業遺産を見学に来て、ということがあるのか、それとも、実習生がそこにいるということなのかなと思って。
- K 研究員：民宿をされている方で、世界の各地からも、そば打ち体験とか景色を見たりで、外国からもお客さんがいらっしやっていて、その人とコミュニケーションを取るのにどうするんですか、という話があったときに、お話されていたのがこの内容で、とても印象に残ったということで感想であげてくれた。
- C 委員：民宿にはどんな国の人が来ていたのか。
- K 研究員：フランスなどヨーロッパの方が興味を持たれていることが多いらしくて、一度来てそれを自分のところに持ち帰って、あそこが良かった、と、さらに口コミで広がって、ヨーロッパからの方が多いうだ。
- A 委員：農学部先生などがアドバイザーとして入られて、その農法の後ろにある科学的なロジックであるとか、そういうところに関するお話、説明、解説などもあったのか。
- K 研究員：科学的な面については、高校の探求課題として扱っており、大学の先生の方では地域の伝統をいかに絶やさないようにしていくかといった研究の一環で携わっていただいている形。
- D 委員：事業の一環でしているようだが、募集はどういった形なのか。
- K 研究員：にし阿波の管内にある高校に通知をして、参加したい生徒さんと担当の先生をつけてもらうようにして、学校からの応募という形にしている。課外授業の一環とされているようだ。

- B 委員：取り上げられているこの6人の名人。なかなか興味深い内容だなと感じた。取り組みについて、今やっていることを継続することも良いが、新しい視点を。去年と同じということじゃなくて、何かを入れていただくようなことも必要になるかなと思った。にし阿波に関しては、いろんなインバウンドも進んでいて、徳島の中ではいろんな文化もあるし、その意味では次の世代につなげていくことが大切かなと思う。

議事3「令和5年度調査研究テーマについての助言・提言」

- B 委員：徳島が消費者行政、消費者教育を進めているので、私としては妥当な調査研究のテーマかなと感じている。
- A 委員：募集要項はどのような形で周知しているのか。
- 事務局：各高等教育機関の皆様や、南部・西部総合県民局に、こちらからテーマをお示しし、照会・回答のような形でテーマをご提案いただいている。
- A 委員：HPには、NPOや民間からの参加を求めて、という説明があるが、これは具体的にはどのような形なのか。
- 事務局：政策研究テーマについては、限られた予算の中で、産学官連携という基本の中で、テーマを決める。今後については、高等教育機関の関係で、テーマの中で民間やNPO法人を巻き込んだ研究内容で提案していただくといったことも発信していつている。今県の機関と高等教育機関からの提案応募という形で審査させていただいて、その中で民間なりを巻き込んだ形で地域の課題解決を図っていただくと。特に先ほどの報告でも出てきたような地域の若い方々を。まなびーあ徳島のHPの中に政策研究内容の報告ということで情報発信させていただいて、それを見た方が政策提案ということで、そこに参画していただける方、法人やNPO法人がまた新たに膨れ上がるというか。そういうことも狙いにしている。今回発表していただいた内容、委員さんからのご意見もオープンにして、次のステップアップとして広がるような形で進めていきたいと思っている。募集にあたっては、NPO法人などが直接提案できるわけではなくて、高等教育機関をベースに今はやらせていただいて、予算が限られた中での事業実施として調整させていただきたいところ。貴重なご提言と思うので、事業を推進する中でどういった工夫ができるか我々も考えていきたいと思う。
- B 委員：実際にHPを見ていないが、もしNPO法人等が応募できるというように勘違いするのであれば表現をちょっと変えるなどの工夫を。研究テーマの選定方法はどのようなものなのか。今回発表いただいた方の他にも応募があつて、それを落としたのかどうか、そういうところももう少しオープンにしてもいいのかなと思う。今後、より良い研究テーマにしていただければと思う。
- 事務局：最終目的は、提案いただいた方が、地域の課題解決をはかっていただくこと。課題解決を図るという視点で研究していたものが、実際実現していかないこともあると思うが、できなくても何か残っていく。そして広がっていくと。そういつ

たことで意見をいただいたので、どういう工夫ができるのか考えて参りたい。

- B委員：落とすようなことは過去にあったのか。
- 事務局：予算の範囲内で、かつ政策研究テーマに沿っていたため、今年度に限っては落とすことはなかった。
- B委員：新規事業と継続があるが、継続も申請した段階で判断するのか。
- 事務局：新たな切り口は非常に大事と思うので、そのあたりは募集にあたっての工夫ができないか考えていきたい。
- オブザーバー：今年度においては、消費者の生命人体の安全といった、消費者にとって必要な調査をされたもの、消費者トラブル防止のための研究、消費生活の基盤でありながらこれまで当庁においても開拓できていない分野において、エシカル消費者思考について消費者の啓発のきっかけになりうるという取り組み、環境問題、人材不足解決に向けた取り組み、徳島ならではの地方ならではの様々な文化を研究されており、もっと詳しく伺いたいなと思った。

**令和4年度 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター
外部評価委員会 評価結果一覧表**

番号	調査研究名	(1)達成度	(2)先駆性	(3)適正性	(4)実用性	(5)発展性	合計
1	公園等の刈草を原料にした資源循環型堆肥の有効利用調査研究事業	20	18	19	20	21	98
2	にし阿波高校生「聞き書き」プロジェクト	20	18	20	17	18	93
3	装飾品に対する品質表示の提言をめざす一般企業等に対する金属アレルギーの実態調査	19	21	21	21	21	103
4	消費生活のデジタル化に対応する若者向けガイドブックの開発	20	20	19	22	19	100
5	「住」生活における消費者志向経営の推進～住まいづくりのエンシカル化が消費者志向経営推進に及ぼす影響～	20	20	22	20	22	104
6	地域循環型プロダクトを生み出すプラスティック・リサイクル・マイクロプラントの開発によるマテリアル・リサイクルの普及促進に関する実証的研究	17	22	20	21	22	102
7	協働ロボット普及を目指したロボットに関するニーズ及び実態調査	18	21	20	24	22	105

※1 評価項目の視点について

(1)達成度

- ①研究目的がどの程度達成されているか。
- ②効果が発揮されているか。または効果の発揮が期待できるか。

(2)先駆性

- ①新しい視点、発想による提案等が含まれているか。
- ②創造性、独自性に富んだものか。

(3)適正性

- ①手段やアプローチ方法が妥当か。
- ②調査や検証が十分行われた内容となっているか。

(4)実用性

- ①地域における実用性、実現可能性が高いものか。

(5)発展性

- ①新しい知見や価値観が得られるものか。
- ②また、波及効果があるものか。

※2 評価基準と評価結果の公表について

(1)～(5)の視点ごとに各委員(5名)が5段階評価「5非常に優れている、4優れている、3普通、2あまり評価できない、1評価できない」で採点を行い、(1)～(5)ごとの委員全員の評価結果の小計、全評価項目の合計、併せて、各委員の所見について代表的なものを公表する。

令和4年度徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター 外部評価委員 所見一覧

調査研究名	委員所見
公園等の刈草を原料にした資源循環型堆肥の有効利用調査事業	<ul style="list-style-type: none"> ・刈草の堆肥化への取り組みは資源環境型社会の実現へ向け重要であり、①製造量の増加②供給先の確保という2大目標が明確化されている。取り組み姿勢が積極的で評価する。 ・もったいない2号の開発と活用は創造性、独自性を感じる。一方、なぜ、もったいない2号を投入した圃場と、そうでない圃場とで生育状況に差異が見受けられなかったのか、その詳しい理由を分析してほしい。 ・意見交換会や栽培試験、実験を繰り返し実施しており、地域で実用性が高いものとして評価する。また、障害者の社会参加や万博会場でのもったいない2号の使用などには期待したい。 ・自然が豊かな徳島では、草木や土の処分にかかる費用がかかるため、刈草を原料とした、資源循環型堆肥の研究は有効であると思えました。 ・環境とコスト、両方のメリットのある事であり、南部総合県民局が支援すること、調査研究に取り組む意義は高いと思います。 ・高校生らによるエコグループが、循環型社会を目指し、活動している点については大きく評価したい。農業法人と協働しながらの栽培実験等、しっかりとSDGsに向き合っていると考えます。 ・今後の発展性の面から考えると、点から線へ、線から面への働きかけが必要であり、より多くの機関との連携や支援も求めることが課題となると思われる。 ・「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」の今後の活動に期待する。 ・堆肥づくりについては、県下の自治体でもすすめられている。世界的に堆肥や飼料の高騰がすすむ中、いかに有用に農業利用に持ち込むのか、成分研究や用途も合わせた今後の研究が必要のように感じた。やっついているポーズだけでおわらない活動となることを希望します。
にし阿波高校生「聞き書き」プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ・次世代に地域の伝統文化や貴重な農法を伝えていく取り組みは重要であり、高校生によるその道一筋の名人への聞き取りは意義深い。ただ、新しい視点や発想はあまり見受けられない。 ・地域の名人はそれぞれ個性的で魅力のある人ばかり。丁寧に聞き取り作業を行っている印象を受け、その内容も興味深い。 ・農業活性化セミナーや世界遺産シンポジウムを通して広く情報発信できたのは良かった。 ・若者に地域資源を見直すきっかけをきっかけ、地域の良さを再発見する学びにつながっていると思うが、後継不足の問題など、その後はどうするかという視点が欠けている気がする。 ・地元の高校生が「食と農の名人」のところに会いに行き、直接話を聞くことができて、とてもいい経験になったと思います。 ・話を聞き、要約するのではなく、「聞き書き」の手法を用いた作品集はその場所を実際のような気持ちになりました。 ・プロジェクトとしての意義は高いと思います。 ・「聞き書き」作品集を読むと、高校生らの熱心な取り組み姿勢が伝わってくる。この聞き書き体験は、彼らの今後の生き方に大きな影響を与えていくことを確信する。 ・「食と農の名人」として、インタビューされた地域の方々にとってもこれまで以上に地域への愛着や伝統・文化の継承について改めて強い思いを抱いたのではないかと想像できる。 ・世界農業遺産に認定された「にし阿波の傾斜地農耕システム」が次世代にわたり伝承されていくことを願うと同時に、もっと広く認知され、地域全体における価値観の共有となることを期待する。 ・地元の高校生が実際に聞き書きをしたということについて意義があると思う。知ることは非常に大切であるので、この結果を是非県下に知らせてほしい。そして、今後どうするか。現在の生活や若者の希望に沿った形で残していけるのか。学術的資料としての保管が継承か、選択は若もに委ねられる。若者たちの実直な意見が知りたい。
装飾品に対する品質表示の提案をめざす金属アレルギーの実態調査	<ul style="list-style-type: none"> ・金属アレルギーのリスクを訴えていくうえで、こうした装飾品を製造する企業側の意見は聞きたいところ。その意味で実態調査を、一般企業にまで広げた意義深く、その内容も興味深い。 ・学会のみならず、フォーラムなどで積極的に情報発信しており、大いに評価したい。 ・今後の課題として、行政への働きかけの重要性を挙げており、同感だ。今後の取り組みに期待する。 ・アンケート調査により、データの収集と情報発信が行えるため、ピアスなどに興味を持ちだす世代(中・高生)を対象に調査を行っているのも有効だと思いました。 ・内容は実用面と切り離さず、政策提言としての部分を、より明確に打ち出し、レポートを読んだ行政担当の行動を促す形式でお願いいたします。 ・金属アレルギーについて、具体的な働きかけを実施し、学会やフォーラムでの報告など一定の成果をもつと考えます。 ・アンケート範囲も、大学生から一般へと広がり、調査対象者が増えたことにより、調査結果がより明確な意味をもつものだと思います。 ・装飾品に対する品質表示は、消費者にとっても重要なものであり、近い将来、欧州のように規制を望むところである。 ・この調査研究が一般消費者への「金属アレルギー」周知となり、装飾品の購入の際、立ち止まって考える契機となればと考える。 ・口にするもの、肌にくれるもの、消費者に向け成分表示をしていくという方向性は正しく、そういった業界への提案、推進として今後もすすめていただきたいと感じた。 ・また、消費者へのリテラシーとしてまずリスクについて具体的なものをもっと世間的に広め、声や被害を集めた方が今後の推進力になると思っています。
消費生活のデジタル化に対応する若者向けガイドブックの開発	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル社会が急速に進展する中、消費トラブルを防ぐのは喫緊の課題。大学生によるアンケートの課題分析は意義深い。 ・新しい発想や先駆性は感じられない。 ・アプローチ方法は妥当。以前に中高年のデジタル消費対応について調査研究しているが、その意味で若者と中高年の違いについての考察があると深みが出ると考える。 ・啓発用のパンフレットは分かりやすく、よくできていると思う。 ・急速なデジタル化により消費生活でのトラブルの種類は世代により異なりますが、どの世代でもおこりうるものであるため、様々な年代での調査を実施してほしいです。 ・Wi-Fi契約という言葉に違和感がありました。「学生の意見」としてリサーチの結果であり、納得しました。 ・啓発資料が完成したことで、目標の達成が認められる。コンパクトなサイズのパンフレットで若者が手に取りやすいと感じる。 ・意識実態調査の結果より、若者の姿を垣間見ることができた。18歳で成人となる現実、デジタル化への適正な対応が求められることを確信した。 ・Wi-Fi契約に限らず、若者を取り囲む様々なデジタル消費について、次のステップに期待したい。 ・視点がとてもよいと思う。デジタル、メディアについて親も子に教えてあげられるほど知っているものでもない。今回のリーフレットも有用で、ぜひ県下の高校にも配布していただきたい。 ・また、今回は、困った、とアンケート結果からの対応であったが、トラブルになりうることについて先んじて知らせていく内容になっていけばありがたいと感じる。
「住」生活における消費者志向経営の推進～住まいづくりのエンカナル化が消費者志向経営推進に及ぼす影響～	<ul style="list-style-type: none"> ・消費者意識の違いを四国4県で比較したのは興味深い。大都市圏との違いも知りたいところ。 ・SDGsがブレイクカードゲームはエンカナル消費が身近に感じられ、先駆性があり、ゲームを社員研修に活用してエンカナル意識を深めたのは評価する。 ・調査にあるように住宅については消費者は価格やデザインを重視する傾向が強い。そうした中、エンカナル消費の思いが強い徳島で、どう意識改革を促していくのか注目しており、今後の取り組みに期待している。 ・住まいの購入は人生で一番時間と費用がかかります。購入者が自分でエンカナルについて学ぶ時間はなかなかないと思うので、事業者へアプローチすることにより消費者がエンカナルの情報無理なく自然に収集できると感じました。 ・R元年からの継続ですので、初期テーマに戻って時系列変化を見ることも有益かと思えます。 ・多くの消費者にとって、最大の消費は家である。SDGsやエンカナル消費の両面より、人生の最も高価な買い物である家について、分かりやすいアプローチがなされている。 ・消費者、事業者の双方にとって将来を見据えた正しい消費への意識づけは重要課題であり、この研究のさらなる発展を望む。 ・SDGsいえずカードゲームの普及とファンリテラシーの育成に期待する。 ・災害が多い日本で、一度被災すると多くのことがと化す日本の家屋。全国的に増加をたどる空家、空室、相続不可の不動産。外国では新築許可を制限する中、家を消費と捉える日本文化について、考えるきっかけになってもらいたいと感じた。高校生などに早期から認識してもらいたい。
地域循環型プロジェクトを生み出すプラスチックリサイクル・マテリアル・リサイクルの普及促進に関する実証的研究	<ul style="list-style-type: none"> ・喫緊の課題であるプラスチックごみ問題に着目し、プラスチック再生機の試作まで行ったのは評価する。一方、プラスチックが実際にどのように粉砕されるのか、その写真がなく、試作途中と見受けられる。 ・プラスチック破砕機や押出成形機には独自性や先駆性を感じる。 ・プラスチック再生機については実用性が高く、実現可能性を感じる。またソーシャルデザインの取り組みやプラスチック再生工場の活用には今後の発展性を感じる。プラスチックの再生を通して地域での環境問題の啓発活動が一層進むと考える。 ・製作した再生機をたかさんの子ども達に実際に体験してもらうことにより、リサイクルについて学ぶきっかけになると感じました。 ・質疑応答の中で、プラスチックの真の成分(添加物)が不明であり、メーカーの協力なしでは進められない、という課題がよくわかりました。県等の協力を得て、飲料メーカーと話ができるはずだと思います。 ・Precious Plasticの活動を高等という場において実践し、体験型活動に役立てながら一歩ずつ進んでいる点を評価したいと考える。 ・生活の中で切り離すことのできないプラスチックの再生や再生されたものの活用方法などSDGsの重要な取り組みであることを再認識した。 ・Precious Plastic活動の根幹となる地域環境問題への啓発として大きな契機となることを願っている。 ・発展途上の研究であるが、資源が今後限られていく中で、興味・関心づけのために有用な研究であると感じた。PEの成分によって用途に限られるとのことで、そういった業界への提案が必要であると感じた。利用範囲の拡大は必要である。
協働ロボット普及を目指したロボットに関するニーズ及び実態調査	<ul style="list-style-type: none"> ・徳島で普及が遅れる協働ロボットのニーズ調査および実態調査は意義深く、調査研究がある程度進んでいる。 ・協働ロボットについての教育教材の開発は創造的で新鮮さを感じるとともに、実習教材を用いた機械メーカーでの実際のリカレント教育は意義深いと考える。 ・地域での実用化が十分期待できる。県内の中小企業の省力化へ向け、協働ロボットを扱える人材づくりを進むことを期待したい。 ・ロボットが人と協働することにより、可能性が広がり、人々の需要に応じたものが早く正確にできると考えられます。 ・政策提言として、行方べき内容をより明確に打ち出していればと思います。 ・情報サービス大手の研究機関によると、日本では2040年には全国で1100万人余りの働く担い手不足となるの見通しが示された。このように、労働力の不足を考慮すれば、ロボット活用は必須となり、各企業においてはロボットを扱える人材を育成することが必要である。 ・協働ロボット活用に向けて、企業等におけるロボット人材育成のための各種講座の開催や、教育機関と連携して普及の重要性を働きかけていただきたい。 ・積極的にプログラミングできるロボットを試し、実際にリカレント講座を行うなど、実証的で興味深い。地域でこのような導入をすすめていくならば、中核となるような企業なりが参入し、雇用と販路に影響していくような体制づくりが必要かと思われる。是非すすめてほしい。